

「見守る」という思いやり



家族を大切にしてい、よりよい家庭を築きたいという
気持ちはだれにでもあります。ところが現実には、なか
なか思いどおりにいかないものです。

今回は、思いどおりにならないわけ、そして、より
よい家庭を築くヒントについて考えてみましょう。

応援してやるつもりが……



「沙希、遅いじゃないか。最近、いつも
こうなのか？」

齊藤さんが妻の敏江さんに言いました。

「いつもじゃないけれど、ここところ
遅い日があるわね」と敏江さん。

「この前も注意したばかりなのに。もう
十時を三十分も過ぎてているぞ」

「でも、沙希、喜んでいたらわ。アルバイ

トを始めるようになって門限を十時に延
ばしてやったでしょう。『私も信頼されて
いるのね』と言ってたわ」

「それはそうだが……。やはりバイト
は、させないほうがよかったかな」

「そんなに心配しなくて。何かあつ
て、いつもの電車に乗り遅れたんじやな
いの」





「何かって？」

「それはいろいろよ。もう高校二年生なんだから、いろいろあるわよ」

「いろいろあるから心配なんだよ」

斉藤家は、斉藤さん(51歳)、敏江さん(46歳)、そして沙希さん(16歳)の三人暮らし。これまでは、斉藤さんが帰宅すると沙希さんが出迎えてくれました。しかし、今はそれがありません。

斉藤さんは沙希さんを心配する気持ちとアルバイトを許した後悔から、次第に不機嫌ふきげんになっていく自分をかくせません。時計は十一時近くになっています。

「ただいまー！」

沙希さんが帰ってきました。

「お帰りー、遅かったのね。お父さんが

心配してお待ちかねよ」

迎えに出た敏江さんの声を聞きながら、無事な娘の声に内心ほっとした斉藤さんでしたが、一方で手放しに喜べない自分がいきました。

「お父さん、ただいま！ 遅く……」

「こんな時間まで、何をやっていたんだ！ もう十一時じゃないか！」

思わず出た強い口調に、斉藤さん自身驚きましたが、勢いはとまりません。

「門限を延ばしたのはバイトのためだ。

それなのに、なぜこんなに遅いんだ」

「それは、最近、バイトで親しくなった友だちからいろいろ相談を……」

「そんなことは理由にならない！」

「そんな言い方ないんじゃないの。私だってがんばって帰ってきたんだし」



「こんな時間になるんだったら、バイト
なんか禁止だ！」

「えっ何よ、突然。私が信用できない
の。もういいわよ。お父さんなんか！」

「お父さんなんか」とはなんだ、こん
なに考えてやっているのに！」

「何も分かってなくせに、勝手に考え
ないでよ！」

そう言つて背を向けると、沙希さんは
二階に駆け上がったしまいました。

「なんだと、もういっぺん言つてみ
ろ！」

沙希さんの後ろ姿に向かつて怒鳴つた
斉藤さん。高まる感情を抑えきれませ
ん。

敏江さんから注意されて、感情的に
なった自分を反省した斉藤さんですが、

だからといって門限を何度も破つた娘を
許すことはできません。さらに、「こう
いうときこそ、ちゃんと聞いて聞かせない
お前が悪い」と敏江さんを責め、夫婦で
言い争いになってしまったのです。

娘の社会勉強のためになるからとアル
バイトを認め、門限も延ばしてやって、
大人に向かつて成長する娘を少しずつ応
援してやろうと考えていた斉藤さんでし
た。それがこんなことになってしまちな
んて予想外でした。斉藤さんにとつて
は、門限どおりに帰ってきて親に心配を
かけない娘が、自分の思い描く娘像だつ
たのです。

思いどおりにならない現実には、斉藤さ
んは家に帰るのさえ気の重い日々が続き
ました。

親は「受け上手」のキャッチャーに

東海大学教授の望月國男氏は、家庭の機能、そして親子のかかわりについて、次のように述べています。

——（家庭の機能の）一つは、心の居場所としての機能、もう一つは基本的な生活習慣や倫理観を育てる機能です。（中略）

私たち大人が心がけたいことは、子どもたちと心のキャッチボールをすることです。野球を子どもに教えるときは、相

手がどんなボールを投げかけてきても、それをキャッチし、相手が受けやすいボールを返してあげますね。それと同様に、子どもの投げたボール（言葉、態度、心）を、親は「心のグローブ」でしっかりとキャッチし、どんなボールでもきちんと受けとめられる「受け上手」、つまり「聴き上手」になりたいものです。

「聴く」と「聞く」は、意味合いが少し違います。「聞く」は、英語ではhearですが、音を耳に感じるとか、ただ聞こえるという意味です。「聴く」は、listenで、耳を傾けて詳しく聴く、受け入れるという意味があります。ですから、相手の立場に立って、相手の心をつかき受けとめる、「聴く」態度が必要だということです。

子どもとのふれあいは、お互いが心のキャッチボールをしていることで、相手の言うことをよく聴き、相手に共感することです。それが、心と心のふれあいの原点になります。

(モラロジー研究所刊『れいろう』平成十八年一月号・特集より)

親は、よい家庭を築き、子どもがよく育ってくれるよう願っています。子どもがなんでも話せるような家庭の雰囲気をつくり、同時に、よい習慣やきちんとした倫理観を教えるよう努力しています。思い描く家庭像・家族像を目標にして、精いっぱい努力を惜しまないのが親の心です。

ところが、親の「こうあってほしい」



「こうありたい」という願いや望みは、知らず知らずのうちに「くでなければならぬ」という、子どもへの押しつけになりやすいものです。その結果、親の期待どおりにならない子どもは、「悪い子」「だめな子」になってしまいます。

目標を描き、それに向かって努力する

ことは尊いことです。しかし、たとえ目標が素晴らしいものであっても、それを
実現していくためには「思いやりの心」
が必要です。



「この家の子で よかった」

子どもが思春期になると、親は子ども
が投げたボールをうまくキャッチできな
くなります。親の予想しないところに
ボールが飛んでくるからです。しかし子
どもは、本当はまっすぐに投げるほうが
よいと分かっています。つまり「よいこ
と」は分かっているにもかかわらず「よいこ
と」は分かっていても投げられないの
が、この時期の子どもの特徴です。

こうした子どもの気持ちを考えない

で、親が「正しくしなさい」と言えば、子どもは「うるさい」「むかつく」となります。きょうだいや友達と比較することや、子どもをなじったり、バカにしたり、軽蔑したりするような言い方や態度は、子どもの心をどれほど傷つけるでしょう。

親は子どもが投げる“暴投”を大きな「心のグローブ」でしっかりと受けとめたいものです。

次に紹介するのは、子どもの苦しみや悩みを受けとめ、親の素直な気持ちを返球した親子、家族の物語です。



家族の愛と言葉

福政珠希（十七歳、鳥取市）

「お前は望んだ宝なんだよ」

中学時代、ふだんは無口な父が私にくれた忘れられない言葉だ。当時、私は人間関係や学校のことでも悩んでおり、自身存在価値や存在の意味を見つめて、毎日のように「なぜ生きているんだ」と疑問をもっては泣いていた。

口数が減り、学校も休みがちになっていた頃のある晩に、初めて父と二人きりで話した。

「怒ったりはしない。ただ、皆お前が心配なんだ。誰だって人間関係に悩むんだよ。もちろん父さんや母さんも。頑張るなんて言わないよ、でも一緒に努力しよう。父さんは仕事でも何でも、お前達が

いるから続けられる。お前の名前は父さんが付けた。どういう意味か知ってるか。〃希(のぞ)んだ珠(たから)〃だ。皆お前に逢いたかったんだよ。大切な家族なんだよ」と、父は言った。

言葉を嘔み締め^かめてうなずくたび涙がポロポロ落ちた。「もうおやすみ」と言われ部屋を出たとき、家族全員がそこにいた。皆心配してくれていたのだ。なんていい家族に育てられていたんだと思うと嬉しく^{うれ}て照れくさくて笑ってしまった。

あのときの言葉と、父や家族の瞳^{ひとみ}は忘れない。あのときの家族の瞳にはきちんとして自分が映っていて、そこに愛を感じたからだ。この家の子で、よかったと思った。

(モラロジー研究所刊『家族のきずなエッセイ作品集』より)



「信じて見守る」という ねばり強さ



では、子どもの気持ちや「心のグロウ
プ」で受けとめるために、親はどのよう
な姿勢が大切なのでしょう。以下の齊
藤さんの気づきは、そのヒントになりそ
うです。

齊藤さんは、沙希さんのことを考えて
いるうち、ふと、ある出来事を思い出し
ました。それは齊藤さんが高校一年生の
ときのことでした。

齊藤さんは、夏休みに友だち三人と旅
行に出かけました。行く先は北陸の海水
浴場。気のあつた仲間だけで行く初めて

の旅でした。それも「泊二日の冒険旅
行。齊藤さんの気がかりは、両親に友だ
ちの家に泊まると嘘をついて出かけたこ
と。しかし、いざ旅行に出してしまうと、
開放感にあふれ、独り立ちしたような自
由な気分を満たされました。

その晩、泊まったユースホステルでの
こと。友だちがお酒、煙草、お菓子など
をどつきり買い込んできました。経験者
が初めての友だちに煙草を教え、齊藤さ
んも誘われました。とまどう齊藤さん
に、友だちが何度も勧めてきました。
「根性ないなあ」。そんな友だちの冷やか



しにむつとして、思わず手を伸ばそうとした斉藤さん。そのとき斉藤さんの脳裏のうりに浮かんだのは両親の笑顔えがらでした。その瞬間、斉藤さんは思いました。

「親に悲しい思いはさせたくない」

斉藤さんは「オレは、今は煙草も酒もやらない」、そう言つて断つたのでした。

家を出るとき、「〇〇君のご両親によろしくね」と送り出してくれた母親。「あまりはめをはずすんじゃないぞ」と笑顔で注意してくれた父親。二人とも斉藤さんを信頼し切っていました。

この出来事で、斉藤さんは人に左右されない自分に自信を持ったのです。

斉藤さんは、今、自分が親になつてみて、子どもが嘘を言っているのか、そう

でないかは分かる。あのとき両親はそれとなく知っていて、それでも自分を信じて見守ってくれていたのではないか。そういう両親の大きな心のおかげで、今の自分がある。そんな思いがしみじみと湧きあがってきたのでした。

齊藤さんは、その晩、仏壇ぶつだんに並んで置かれてある両親の写真に向かってわびま

した。

「一人前の親のつもりでいましたが、沙希の気持ちを受け入れてやる余裕がありませんでした。自分の思いだけで沙希が悪いと決めつけていました。父さんや母さんのように子どもを信じてねばり強く見守ることが、少し分かったように思います」

気持ちを受け入れ、 気持ちを伝える



翌日のことです。沙希さんは門限を過ぎてても帰ってきません。すでに十一時を過ぎていきます。

「親の心子知らず」だな。やはり、バイトなど許さなければよかつたな」

と齊藤さん。

「何言ってるのよ。私がお父さんと出会ったのは、私がアルバイトをしていたお店にお父さんが来たからじゃないの」
「んっ、それはそうだけれど……」



「あのころ、私の父も母も本当に心配してたわ。〃親の心子知らず〃の私たちのために」

そう言われて思わず苦笑にがわらいをした斉藤さん。視線しせんを移した先には、仏壇の横で二人を見守る両親の写真がありました。

「ただいま……」

かすかに聞こえた沙希さんの声に、二人は玄関に飛び出しました。

「お帰り、沙希、遅かったじゃないの」

「うん……」

軽くうなずいた沙希さんの視線は、お

そろおそろ斉藤さんのほうへ。

「沙希、だいじょうぶだったか。本当に心配したぞ、無事でよかった」

「お父さん、実はバイト仲間から相談を受けて話し込んだじゃったの。だって、彼女、とつても落ち込んでいたのよ」

「そうか……。しかし、連絡はちゃんとするんだぞ。お父さんもお母さんも、本当に心配したんだよ」

「はい、気をつけます」

「さあ中に入って。話はゆつくり聴くよ。腹は減ってないか?」

「少しすいてる。ごめんね、お父さん。」

心配ばかりかけて」

「そうだな……。沙希も成長し続けているってことかな」

「うん!」

よりよい家庭を築く原動力

家族のきずなが希薄になっている今日です。私たちは、しっかりとした家庭像を描いて、その実現のために努力することが大切です。しかし、自分中心に考えやすい私たちは、自分でも気づかないうちに、自分の思いだけで子どもを非難したり責めたりしがちです。それがかえって子どもを傷つけ、成長や反省の芽をうんでしまうことがあります。

目標を実現していくためには、思いやりの心が必要です。子どもを信じて、ねばり強く見守り、導いていくことは、思いやりの心です。子どもの成長をよく理解して、その気持ちを受け入れ、親の素直な気持ちを伝えることが大切です。

こうした心づかいと行いは、温かい人

間関係を築き、よりよい家庭を築いていく原動力となるに違いないでしょう。

